

コロナ禍におけるソーシャル・ディスタンシングゲーム

: 多様な学習者同士の協働的ネット型ボール運動実践

横浜国立大学教育学部

梅澤 秋久

横浜国立大学教育学部附属横浜小学校

露木 隆夫

横浜国立大学教育学部附属鎌倉中学校

坂本 光平

1. 問題の所在と研究目的

1.1. 新型コロナウイルス感染症拡大の推移

日本の厚生労働省が「中華人民共和国湖北省武漢市における新型コロナウイルス関連肺炎について」と、新型コロナウイルスという表記を用いて最初に報道発表したのは令和2年1月20日である^{注1)}。2日後に同報道発表資料は書き換えがなされ、国内の発生状況について「1月22日現在、確認されている感染者は1名である。当該感染者は既に軽快。」(厚生労働省, 2020)とある。同報道では、日本国外の新型コロナウイルス関連の肺炎と診断されている症例及び死亡例の数として「中国, 感染者440名, 死亡者9名。タイ, 感染者2名, 死亡者0名。韓国, 感染者1名, 死亡者0名。台湾, 感染者1名, 死亡者0名。米国, 感染者1名, 死亡者0名」と記載されている。

しかし、この約1ヶ月後の令和2年2月27日の夜、新型コロナウイルス感染症対策本部より感染拡大を防止する目的から「全国全ての小学校、中学校、高等学校、特別支援学校について、来週3月2日から春休みまで臨時休業を行う」と要請が出される事態に陥った。この時点で日本の感染者数は171名(有症状者数156名)、死亡者数3名であり、学校関係者にとって突然の臨時休業の決定は青天の霹靂であったと容易に想像がつく。他方で、世界的規模で新型コロナウイルス感染症は拡大し続け「pandemic=世界的大流行」となった^{注2)}。日本においては、令和2年4月7日に埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、大阪府、兵庫県及び福岡県を対象区域とした同年5月6日までを期間とする緊急事態宣言が発出された。しかしながら、その効果は劇的なものではなく、同年4月16日に全都道府県がその対象に拡大され、その後、5月7日以降も緊急事態宣言は延長されることとな

った^{注3)}。まさに未曾有のコロナ禍への突入であったといえる。

日本の学校教育においては、学校の春休みが明ける4月7日より緊急事態宣言が発出されたため、首都圏に至っては解除がなされた後の5月末までの公立学校の臨時休業の延長が続き^{注4)}、結果的に児童生徒はおよそ3ヶ月に渡ってほぼ登校できない日が続いた。

1.2. 外出自粛と身体不活動

コロナ禍においては、「自粛」が一つのキーワードとなった。令和2年2月25日発出の「新型コロナウイルス感染症対策の基本的対処方針」(新型コロナウイルス感染症対策本部, 2020a)においては、「発熱等風邪症状」「患者との濃厚接触者」の外出自粛に加え、「患者クラスター(集団)に関係するイベント」の自粛要請が出された。しかしながら、同年3月28日の同「基本的対処方針」(新型コロナウイルス感染症対策本部, 2020b)においては「外出自粛の要請」と文言の範囲が広範となった。緊急事態宣言がゴールデンウィークにかかっていたこともあり、「今年のゴールデンウィークは外出を控えましょう！」(首相官邸, 2020)という「ステイホーム」という記載のあるリーフレットを作成する等、以降、メディアを巻き込み「外出自粛」「ステイホーム」のキャンペーンとなったといえよう。

他方で、先の「今年のゴールデンウィークは外出を控えましょう！」のリーフレットには、図1の通り、完全に身体活動や子どもたちの遊びを禁止しているわけではない。しかしながら、コロナ禍における不安の伝播と偏った正義感とは、所謂「自粛警察」^{注5)}を登場させることに繋がった。つまり、自粛要請に応じない個人や商店などに

② 近場の外出でも 密集・密接を避ける!



図1 「GWは外出を控えましょう」の一部

私的に取り締まりや攻撃が加えられる可能性が生じたことから、屋外での身体活動が実施しにくい状況が生じたことと推察される。

子どもに限定すれば、学校の臨時休業によって体育や休み時間の自由遊びが消滅しただけでなく、通学という生活行動まで奪取されたことになる。自宅の中でできる身体活動も存在するであろうが、住宅事情や保護者のテレワークの状況など、十分な活動量の確保には疑問が残る。事実、成人に関する「歩数調査(n=16,302)」^{注6)}では、新型コロナウイルス感染拡大前の2020年1月段階において1日あたりの歩数レベル「3,000歩未満」が15.4%であったのに対し、緊急事態宣言中の5月段階では同歩数レベルが29.5%と2倍近くになっている。

国際的な公衆衛生学会(The LANCET)においては2012年以降のパンデミックの関心事の一つは、inactivity(不活動)である。2030年にはアフリカ大陸の死亡原因が感染症から生活習慣病がとって変わるといわれる現在、世界の死亡原因の第4位が運動不足だといわれている(Harold, 2012)。「コロナ太り」という言葉も生まれるなか、運動不足は単に身体的な肥満に向かうだけでなく、心の病を誘発する要因でもある。つまり、コロナ禍において子どもたちは「密閉・密集・密接」の所謂「三密」を防ぐことばかりを優先されすぎ、結果的に心も体も不健康に向かいかねない状況だと換言できる。そのような状況下、文部科学省からの通知^{注7)}では、コロナ禍においての各教科等の学習の在り方について提言がなされた。そのなかには感染リスクの高い活動は「行わない」という文言が存在し、体育科・保健体育科においては「児童生徒が密集する運動や児童生徒が近距離で組み合ったり接触したりする場面が多い運動」が「行わない」例として挙げられている。体育への自粛要請とも解釈され、臨時休業明けの体育では、個別の身体活動を主

とする「体づくり運動」が多く実践されていたと考えられている(久我ら, 2020)。

他方で、個別の体づくり運動を実施していたところ「せっかくみんなでいるんだからボール運動をしたい」と児童から不満があがったという実践報告(梅澤ら, 2020a)もある。当然、コロナ禍における公教育では物理的な距離は保たなければならない。しかし、それが子どもたちの心の疎遠に繋がっては公教育として本末転倒である。むしろ、他者と物理的な距離を保つことをゲーム上のルールとする「ソーシャル・ディスタンシングゲーム」を積極的に実践しつつ、子どもたちの心と体を健康にしていかなければならないと考えられる。梅澤ら(前掲)では、ソーシャル・ディスタンシングゲームとしてベースボール型ゲームとダンス領域の実践報告をしている。

新型コロナウイルス感染拡大は第一報から7ヶ月以上経過しても収束の目処は立たず、第二波、第三波だけでなく、異なる感染症拡大時への対策のため、他者との物理的な距離を保持しつつ、体育科固有の多様な他者との関わり合いのある効果的な学習デザインの実証的な研究を蓄積していく必要があると考えられる。

1.3. 研究目的

本研究においては、コロナ禍における子どもたちのストレス状況を把握した上で、ソーシャル・ディスタンシング(感染防止のための物理的な距離の確保)を踏襲したボール運動領域の学習内容を提言し、多様な学習者同士が協働的に学ぶ上での知見を得ることを目的とする。

2. 研究方法

2.1. 実践対象

2.1.1. 対象学級と指導者

対象: A国立大学附属B小学校第5学年の3学級(対象児童109名)

指導者: 同校の男性教諭(教職経験16年)が全学級の体育を同様の学習デザイン、単元計画に基づき指導した。

2.1.2. 実践時期

まず、「一斉休校期間」の5月下旬にオンラインにてオリエンテーションを実施した。6月1日の登校再開後は、各学級の半数で授業を実施する「分散登校期(6月9日~6月26日)」と全員が一堂に会する「一斉登校期(6月第4週目以降)」に分けて実践した。

2.1.3. 「三密」を未然防止するネット型ボール運動の学習デザイン

他者との身体における直接的、間接的な関わり合いを含めるスポーツや身体活動を教材とする体育科は、コロナ禍においては「三密」を避けた学習デザインが希求される。「密接」や「密集」が発生しやすいボール運動は回避されやすい傾向にあるが、ネット型ボール運動はネットを挟んでの攻防となるため対戦相手との距離は維持しやすい特性がある。しかしながら、小学校学習指導要領におけるネット型ボール運動の例示には、ソフトバレーボールやプレルボールなど同じコートに複数名の児童が入り、密集の可能性が高い内容しか記載がないのが現状である。中学校以降の保健体育科には、テニスや卓球が例示として記載されているが、通常の小学校には用具が存在しない。

そこで、本研究ではテニピンを採用した。テニピンとは、テニスとピンポンを組み合わせたネット型ボール運動である。個別に段ボールで制作したラケットを使うため、用具の貸し借りが不要であり、ネットで仕切るため相手との距離を明確に保てる。

テニピンは、ネット型特有の①相手とラリーを繋ぐ、②ネットを挟んだ攻防をするといった運動特性を有する。一斉休校明けゆえに個別の運動ではなく、仲間と関わり合いながら学ぶ楽しさを味わってほしいと考えた。

ボールは大きさ、やわらかさ、跳ね具合を考慮し、YONEX のキッズ/ジュニア用のスポンジボール2TB-15を使用した。

2.1.4. 単元計画

本単元は、5年生全3クラスを対象に休校期間のテニピン制作の課題に加え、分散登校期間4時間、一斉登校期間4時間の計8時間で行った(図2)。

0時間目として休校期間中に、日本テニス協会のホームページを参考に各自オリジナルテニピンラケットを作るという体育と図工の合科の課題を出した。また、Zoom

を使ったオンラインミーティング中に授業実践者の大切に行っている体育授業全体の理念「いつでも、どこでも、だれとでも、自分なりに」を提示した。オンラインミーティング上では、自分の作ったラケットを友達に見せようなど本単元への期待を滲ませていた。

休校明けに行った8時間の体育科の授業では、クラステーマを基に各自が個人テーマを設定しながら取り組んだ。同じテーマの2・3・4時間目であるが、毎時間各自が考え、取り組み、共有したものを基に3・4時間目には「より」「もっと」の言葉を足して深い学びとなるよう促した。6・7・8時間目も同様の流れとした。また、分散登校期間は1コート2名のシングルスで行い、一斉登校期間は1コート4名のダブルスで行った。なお、ダブルスは、各コートの中央に1m程度のラインを引き、体育館の場合は1m程度のゴム板の目印を置くという手立てを講じ、フィジカル・ディスタンス(以下、物理的な距離を示す場合は、フィジカル・ディスタンスと表記する)の意識付けとした。

2.2. 分析方法

2.2.1. ストレス調査

コロナ禍における児童のストレス反応を調査するために、嶋田ら(1994)の「小学生ストレス反応尺度」(4因子20項目、4件法)を用い、まず登校再開直後に「休校期間」を想起して回答を求めた。また、「分散登校期間」(単元4時間目後)および「一斉登校期間」(単元第8時間目後)にも同様の質問紙調査を実施した。

休校期間のストレス反応調査結果は単純集計し、授業実践者の学習デザインに活用することとした。また、休校期間、分散登校期間、一斉登校期間毎の児童のストレス反応状況について一元配置分散分析によって平均の差を分析した。

分析は、SPSS25.0を用い5%未満を有意差あり、10%未満を有意傾向ありとした。

時数	0	1	2～4	5	6～8
登校状況	休校期間	分散登校期間		一斉登校期間	
体育授業の理念	【いつでも どこでも だれとでも 自分なりに】				
毎時間のクラステーマ	オリジナルテニピンラケットを作ろう	オリジナルテニピンで打ってみよう	テニピンを楽しむためには、どうする？	ダブルスをメンバー全員で楽しむには？	せまい空間でもメンバー全員で楽しむには？

図2 テニピン単元計画

2.2.2. 自由記述分析

毎時間の児童の自由記述による振り返りは、本時の学びの様相を示唆する記述がなされると考えられる。本研究ではKH-coderを用い、自由記述で記載された文章を「分散登校期間」と「一斉登校期間」に区分け、テキストマイニング分析(樋口,2004)を実施した。児童の視点から学びの様相がどのように変化したかを可視化する。分析にあたっては、体育科教育学の研究者3名(大学教員1名、修士を有する現場教員2名)によって、児童の自由記述の原文データを取り入れながら検討し、3名の意見が異なるところは、意見が一致するまで分析を繰り返し、信頼性を確保した。

2.2.3. エピソード記述分析

毎時間の授業場面をビデオ撮影し、各時間の特徴的な学びの様相を「エピソード記述」にて描いていく。エピソード記述とは、鯨岡(2005)が提唱する質的な研究アプローチである。佐藤ら(2015)は、体育におけるエピソード記述を「単なる指導技術の向上や一般化された指導方法の獲得を目指すものではない」とし、「運動の中心のおもしろさや理論的背景、興味関心を『地』として、出来事を『図』として見て記述する」と述べている。

本研究では、ネット型ボール運動の中心のおもしろさと位置付けた「ネットを挟んだつながり及び攻防」を「地」として、児童の他者との関わり合いの学びの様相を「図として」記述していく。分析にあたっては、体育科教育学の研究者3名(大学教員1名、修士を有する現場教員2名)によって、授業映像と児童の自由記述の原文データを踏まえながら検討し、3名の意見が異なるところは、意見が一致するまで分析を繰り返し、信頼性を確保した。

3. 研究結果と考察

3.1. 児童のストレス

3.1.1. 休校期間中の児童のストレス状況

3ヶ月に及ぶ休校期間における児童のストレス反応を調査した結果を表1に示す。4件法の調査であるため、中央値である2.50を上回るとストレスを感じている傾向を示す。

本研究対象の児童らは、「つかれやすかった」(Av.2.39±1.08)、「イライラしていた」(Av.2.21±1.09)、「ふきげんで、おこりっぽかった」(Av.2.17±0.99)の3項目で、平均値が2.00を上回ったものの、中央値である2.50を

上回るほどではなかった。

全体的に「そうではない:1点」から「どちらかといえばそうではない:2点」の間で平均値が収まっており、休校期間中のストレス状況は予想以上に低かったといえる。

他方で、標準偏差が1.0を上回るか、それに近い値を示す項目が大多数であり、ストレス状況には格差が存在すると考えられる。

表1 休校期間中の児童のストレス状況

因子	No.	質問内容	平均±標準偏差
身体的反応	8	体がだるかった	1.79 ± 0.97
	10	頭がくらくらした	1.60 ± 0.83
	12	つかれやすかった	2.39 ± 1.08
	13	ずつうがした	1.61 ± 0.89
	16	気もちがわるかった	1.36 ± 0.76
	抑うつ・不安	2	かなしい気分だった
5		なんだか、こわい感じがした	1.54 ± 0.77
14		なんとなく、しんぱいだった	1.81 ± 0.93
17		さびしかった	1.78 ± 1.02
19		気もちがしずんでいた	1.58 ± 0.82
不機嫌		3	イライラしていた
	7	ふきげんで、おこりっぽかった	2.17 ± 0.99
	9	なにもかも、いやだと思った	1.62 ± 0.83
	11	気もちが、むしゃくしゃした	1.70 ± 1.00
	15	だれかに、いかりをぶつけたかった	1.85 ± 1.02
	無気力	1	体から、力がわかなかった
4		あんまりがんばれなかった	1.84 ± 0.81
6		勉強が手につかなかった	1.72 ± 0.87
18		なにかに集中できなかった	1.90 ± 0.99
20		なにもやる気がしなかった	1.72 ± 0.92

N=109

3.1.2. ストレス反応尺度の推移

児童のストレス状況を①休校期間、②分散登校期間、③一斉登校期間の因子毎の平均点に差があるかを一元配置分散分析で検討したところ、「抑うつ・不安」因子において1%水準の有意差がみられた($F(2, 198)=7.397$, 偏 $\eta^2=0.070$, $p<.01$)。そこで、「抑うつ・不安」因子について多重比較検定(Bonferroni法)をおこなったところ、1%水準で一斉登校期間が休校期間よりも有意に低く、5%水準で一斉登校期間が分散登校期間よりも有意に低くなっていた。また、「無気力」因子は10%水準の有意傾向が認められた($F(2, 198)=2.775$, 偏 $\eta^2=0.027$, $p<.1$)。そこで、「無気力」因子に多重比較検定(Bonferroni法)をおこなったところ、5%水準で一斉登校期間は分散登校期間よりも有意に低くなっていた(表2)。

「抑うつ・不安」因子内の個別の質問項目を検討すると、休校期間から分散登校期間にかけて「なんとなくしんぱいだった」の項目が1%で有意に低下していた。また、分散登校期間から一斉休校期間にかけては「かなしい気分だった」と「さびしかった」がそれぞれ1%水準で有意に低下していた。また、「無気力」因子内の個別の質問項目を検討すると、休校期間から分散登校期間に有

表2 児童ストレスの因子毎の平均値の差の検定

	休校期間	分散登校期間	一斉登校期間	F	多重比較検定	偏 η^2
身体反応	8.73 (3.09)	8.96 (3.85)	8.95 (4.02)	0.400	ns	.004
抑うつ・不安	8.49 (3.01)	8.16 (3.40)	7.38 (3.00)	7.397	** 休校>一斉** 分散>一斉*	.070
不機嫌・怒り	9.41 (3.91)	9.31 (4.71)	9.03 (4.62)	0.679	ns	.007
無気力	8.79 (3.11)	9.05 (3.77)	8.42 (3.56)	2.775	† 分散>一斉*	.027

()SD, ** $p<.01$, * $p<.05$, † $p<.1$ N=100

意差の生じる項目はなかったが、分散登校期間から一斉休校期間にかけて「体から力がわかかなかった」と「なにかに集中できなかつた」の2項目が5%水準で有意に低下した。

以上より、本研究の対象児童らは、平均値からみると休校期間において大きなストレスを感じていたわけではないが、分散登校期間を経て一斉登校期間にかけて、悲しさやさびしさ等「抑うつ・不安」要素が薄れ、力がわき、集中できる等「無気力」要素も減ったと考えられる。

3.2 児童の自由記述分析

3.2.1 分散登校期間のテキストマイニング

児童の毎時間の自由記述の振り返りから、授業の様相を可視化するためKH-coderを使用したテキストマイニング分析結果を示す。図3は分散登校期間の分析結果である。KH-coder にかけた自由記述は、総抽出語数(使用)が20,219(7,444)、異なり語数(使用)が1,296(980)であり、1,104の文、341段落であった。集計単位を「段落」とし、出現数による語の取捨選択は、「異なり語数(使用)」の上位約10%にあたる出現回数10回以上を分析対象とした。なお、円の大きさは出現回数の多さを示し、関連のある語は線で結ばれている。

分散登校期間の特徴は、中央下部にある大きな円に示される語の通り、「テニピン」では「相手」と「ラリー」が「続く」と「楽しい」といった表現が多かったことが分かる。具体的な自由記述としては、「今日は、自分がやりやすいように打ったけど、相手が全然取れてなかったから、次回は相手が打ちやすいようにやってみる」(2時間目)や「相手が打ちやすいように、お互い考えると、ラリーが続くはず。ラリーが続くようになってきたら、相手の少しずれた所に向かって打ったり、打てるかギリ

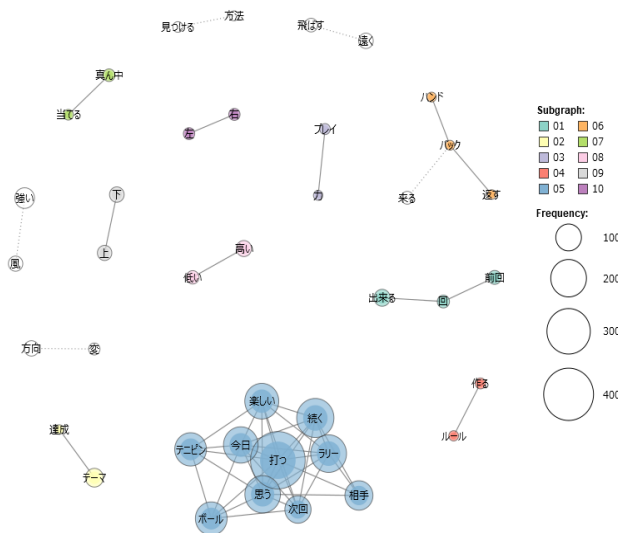


図3 分散登校期間のテキストマイニング分析結果

ギリの所を楽しむのもいいと思う」(3時間目)等がみられた。

3.2.2 一斉登校期間のテキストマイニング

図4は一斉登校期間のテキストマイニング分析結果である。KH-coder にかけた自由記述は、総抽出語数(使用)が18,258(6,462)、異なり語数(使用)が1,318(1,027)であり、974の文、299段落であった。集計単位を「段落」とし、出現数による語の取捨選択は、「異なり語数(使用)」の上位約10%にあたる出現回数10回以上を分析対象とした。

一斉登校期間の自由記述では、先述の分散登校期間と同様に「相手」と「ラリー」が「続く」と「楽しい」といった語が多かった(左下の大きな円の集合)のであるが、同カテゴリに「ダブルス」と「勝負」が追加されているのが特徴的である。また、「テーマ」も同カテゴリ

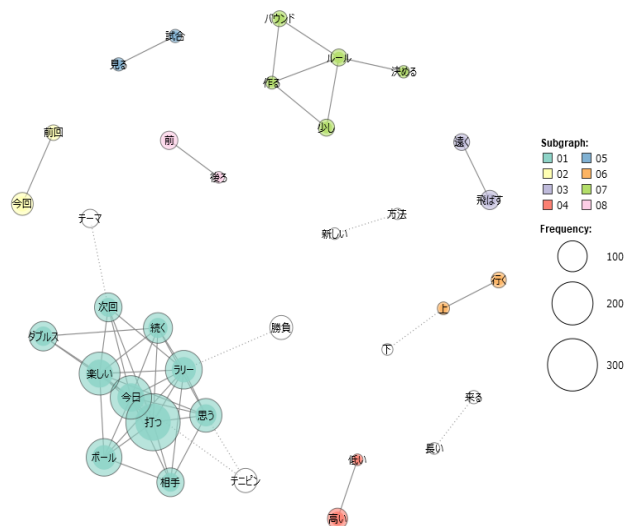


図4 一斉登校期間のテキストマイニング分析結果

に付随している。分散登校期間では「テーマ」を「達成」できた／できなかったという振り返りが多かったのに対し、一斉登校期間では「次回は〇〇したい」という自ら学び考え、主体的にテーマ設定している児童が増えたのも特徴的である。

さらに個別の自由記述に着目すると、以下の2つの楽しみ方に大別された。

1 つめは勝負の面白さに没頭する児童の記述である。例えば、「今回は勝負をした。ラリーの時みたいに、続かなかったけど、ラリーと違う楽しみがあった」や「相手とすごい楽しい勝負ができました」等がみられた。

2 つめは他者との協働創造の面白さに没頭する児童の記述である。例えば、「ダブルスの相手や味方が楽しむときは、下から打った方が長く続くので楽しいと思いました」や「バウンドルールを作るなど色々なおもしろい遊び方が思い浮かんだので、工夫して遊ぶのは楽しいと思いました」等である。

3.3 児童の学びのエピソード

3.3.1 エピソード1：運動技能格差を包摂する「ネット型」の学び合い

2時間目、前時に続いて1対1でテニピンを行った。

カイリ（女児：仮名）は、突っ立ったままプレーをしており、空振りばかりでラケットにボールが当たらなかった。一方、リキ（男児：仮名）は、前時にシュン（男児：仮名）と何回も続くラリーを楽しんでいた児童であ

る。

ラケットに当たらないカイリに対して、リキはふわっとした、ちょうどカイリの手前でバウンドをするようなボールを送っていた。初めのうちは足が動かず、来たボールに対して腕が縮こまって空振りをしていたカイリだが、リキの「動いて！」のアドバイスで、バウンドするボールの真横に立ってラケットに当てられるようになってきた。その変容を見ていたリキは「思いっきり打って！」と大きな声で言った。バウンドの最高点で力を込めて打ったカイリの一打は、ボール操作に慣れているリキでも止めることはできなかった。教師は、思わず「カイリ覚醒！」と声をかけた。気分を良くしたカイリは、表情が明るくなりリキが取れないようなスマッシュを何度も決めていた（画像1）^{注8)}。

【考察】

最初カイリは自分から遠い位置のボールに棒立ちのまま打とうとし、ネットを越える返球が出来ずにいた。しかし、リキのアドバイスと打ち返しやすいボールの送り出しによって、ネットという障害物を越えて相手コートにボールを送り出せるようになった場面である。

バウンドの最高点でラケットにボールが当たるようになったカイリは、ボールの弾んでくる位置に移動して思い通りラケットにボールを当てられるようになり、何度もスマッシュを打ち込めるほどに技能が向上している。

これは、リキの配慮によって、ネット型ボール運動の特性である「ネットを挟んだボールのつなぎ合い／攻防」に繋がる「ボールの送り出し運動」にカイリが参加できた状況であり、さらに、スマッシュを打つ楽しさを味わい、没頭していると解釈される。

一方、リキの事後の振り返りには、「相手のカイリさんが強すぎて苦戦してしまいましたけど、今までで一番楽しかったです。」とある。リキはカイリの技能向上に



画像1 笑顔でスマッシュするカイリ

向けて心を砕き、専心的に関わり続けた結果、両者がテニピンの本質的な面白さである「ネットを挟んだ攻防」に没頭できたと解釈される。

3.3.2 エピソード2：ダブルスでの仲間同士の連携プレーの創発

毎回変わるペアや対戦相手とその都度ルールや楽しみ方を工夫してきたミチカ（女児：仮名）である。8時間目は、ペアのヒカル（男児：仮名）を含め、対戦相手のユウキ（男児：仮名）とシュン（男児：仮名）で、初めて同じコート内に女子一人となった。ユウキとシュンが入れ替わり立ち替わりにヒカルをねらい続ける場面。ヒカルは、ミチカがつまらなそうにしているのを見つけた。そこで、前衛のミチカに向かってコートの後方から自身の身を投げ出しながら打ちやすいボールをパスした。自分たちで「バレーボールのように自コート内でパスがOK」「バウンドもOK」とルールを創っていたのである。ミチカは、ヒカルがポンと上げたボールの落下点に入り、体を使ったスマッシュを相手コートに打ち返した（画像2）。

【考察】

ミチカは、授業の振り返りで「今日、すごく印象的だったのは、ヒカルさんのスマッシュです。すごく速くてすごかったです。また、新しい方法を見つけました。ヒカルさんが打った後、私が打つみたいな方法です。私があんまり打てていなかったら、私にパスをしてくれたヒカルさんみたいな協力する力はすごく大切だと思いました。」と記述している。

ポンと上げられたボールは、ネットよりも高くバウンドし、ヒカルがそれまで打ち続けていたスマッシュをミチカが実践した点が特徴的である。

テニスや卓球は、守攻一体のネット型ボール運動である。すなわち、ネットを越えてきたボールを1スイングで返球しなければならないため、守りつつ攻めるのが特性である。一方、ネット型であってもバレーボールは、複数回自コートでボールを繋げるため、所謂トスを上げるプレーによって鋭角にアタックを打ちやすくなる特性がある。

ヒカルは相手チームとの格差のある中、コート内にいる全員が楽しむためにはどうしたらいいかを考えていた。ルールを最大限に活用するなかで、プレー上の繋がりを意識しつつミチカのスマッシュを誘発し、ダブルステニピンの特性を共に深く味わえた場面だと解釈される。



画像2 ヒカル（後方）の上げたボールを全身でスマッシュするミチカ

3.3.3 エピソードから見た他者との関わり合い

エピソード1は、分散登校期間でありクラスの半数のみの授業である。ゆえに、ネットを挟んだ1対1の攻防により、フィジカル・ディスタンスを保持しやすい状況を生み出した。エピソード2は、一斉登校期間でありダブルスでの実践となるが、1m程度のディスタンスの目印を置くことで一定の距離を保ちつつボール運動の実践が可能であると考えられた。

他方で、ボール運動では、多様な運動技能を有する学習者が存在するなか、単に自身の勝利だけを追求する姿勢が生じた場合は運動格差の低水準児童が参加しにくい状況になる。秋田(2012)によれば、教育の質は「安心・居場所感」と「学習対象への深い関与・没頭夢中」の2軸で決まるという。

本実践研究においては、授業者は体育授業全体の理念として「いつでも、どこでも、だれとでも、自分なりに」を児童らに提示しており、リキやヒカルは「だれとでも」を体現しつつ、カイリやミチカに「安心・居場所感」を与えていると考えられる。また、リキやヒカルは、ネット型特有の①相手とラリーを繋ぐ、②ネットを挟んだ攻防をするといった運動特性を自身が味わいつつ、カイリやミチカにもその学習対象（テニピン）への深い関与を誘発し、没頭夢中の状況を創出していると考えられる。すなわち、運動格差の高水準児童の専心的なケアリング（梅澤, 2015）によって、ケアする人（リキやヒカル）、ケアされる人（カイリやミチカ）とスポーツ/運動（テニピン）との三位一体の学び合いが実践されていると考えられるのである。このような状況は、単に「低水準の相手に合わせてあげる」のではなく、専心的に関わった働きかけを相手が受容し、応答する過程で互恵的な関係性が向上する（梅澤, 2015）。さらに、その結果として

コロナ禍におけるソーシャル・ディスタンシングゲーム

ラリーが続くようになったりスマッシュをレシーブする必然が高まったりと自身の運動技能の向上にも繋がり、さらなる専心的なケアを創出するというケアリングの好循環を生み出していると考察された。

4. 総合考察

本研究においては、コロナ禍における子どもたちのストレス状況を把握した上で、ボール運動領域の学習内容を提言し、多様な学習者同士が協働的に学ぶ上での知見を得ることを目的としていた。本研究において考察された点を以下に述べる。

4.1. コロナ禍の児童のストレスの変容

本研究対象児童たちは、3ヶ月にも及ぶ休校期間においても総じてストレス反応が高いとはいえない状況であった。しかしながら、登校再開後には、ストレスは「抑うつ」や「無気力」の因子において好転が認められ、児童らの「しんぱい」が減ったと考えられる。また、一斉休校期間になると「かなしさ」や「さびしさ」が低下し、「体から力がわき」、「集中でき」ようになっている。コロナ禍における感染拡大防止は必須であるが、登校によって児童のストレスは減少される可能性が示唆された。

4.2. コロナ禍におけるテニピンの教育的意義

本研究では、コロナ禍の小学校体育において、対戦相手との物理的な距離を確保しやすいテニピンを採用し、学びの様相を辿った。

「このテニピンは、4人でも2人でも楽しめるし、ラリーも続くと楽しいし、ソーシャルディスタンスも保つことができるので、またやってみたいです。」という最終授業の振り返りの通り、児童もコロナ禍におけるテニピンの意義を感じている。

その意義とは、フィジカル・ディスタンスの維持と運動自体の楽しさの享受である。

フィジカル・ディスタンスについては、分散登校期間は学級内の児童が半数であったため1コートあたり2人という学習環境が準備でき、さらにネットで遮断されているため、密接を完全に防げた。また、一斉登校期間においては1コートに4人となるため、校庭の場合は自コート内を縦に1m程度の間隔のライン（校庭）を引く、体育館の場合は1m程度のゴム板の目印を置くという手立てで、ダブルスのメンバーとの密接場面を減らせた。

小学校において自作のラケットで実践できるテニピンは、コロナ禍においてはフィジカル・ディスタンスを保持しやすいボール運動だと考えられる。

運動自体の楽しさについては、分散登校期は常に自身がボールを打つ必然があり、個別の技能の習得に繋がりやすい状況になったと考えられる。事実、分散登校期間のテキストマイニング分析結果（図3）には技能についての振り返りが多く、例えば「真ん中に当てる」、「変な方向（左右）に飛ばされてラリーが続かない」等の記述であった（図3）。他方で、ネット型のボール運動ゆえに、自身が打ったボールがネットにかかったり、大きくコートから外れたりすると相手のボール操作の機会は奪われる。そこで、3.3.3.で述べたような運動場面における互恵的なケアリング関係が生じやすくなったと考えられる。

単元後半である一斉登校期間では、技能に関する記述よりも「テーマに沿っての振り返り」や「ルールの工夫、新しい方法」による「勝負」や「ラリー」の記述が増えている（図4）。それは、指導者が提示した「メンバー全員で楽しむには？」というテーマに準じて、コート毎に「勝負の面白さ」もしくは「他者との協働創造の面白さ」に没頭する児童がそれぞれ存在したためだと考えられる。すなわち、コロナ禍においても、運動との多様な関わり方を許容するテーマを教師が設定すれば、ネット型特有の①相手とラリーを繋ぐ、②ネットを挟んだ攻防をするといった運動特性を児童らは深く学べると考えられる。

4.3. 多様な他者との互恵的な学び

OECD(2018)のEducation2030では2030年の教育の目的を個人的/社会的Well-being（幸福）と定義し、国際的な教育の在り方を検討している。Education2030は2019年に第二局面に突入し全ての教科に先立ち、体育の検討結果を公開している(OECD, 2019)。そこでは、格差社会における「多くの不利な立場にある生徒にとって、体育の授業は、構造化され、監督された身体活動に従事する唯一の機会」とされている。すなわち、体育でしか運動しない児童・生徒の存在が懸念されているのである（梅澤, 2020b）。

コロナ禍を理由に体育を「行わない」という判断は不活動の誘発に繋がりがかねない。とりわけ、体育でしか運動しない児童にとっては大きな懸念となる。さらに、個

別の身体活動だけに傾斜する体育では、場を共有する他者との物理的な距離のみならず、心理的な距離を助長させかねないと考えられる。

本研究においては、3.2.1「分散登校期間のテキストマインニング」の自由記述の具体、および3.3「児童の学びのエピソード」の通り、ケアリング関係の創出が認められた。すなわち、運動格差の低水準児童へのケアにより、ネットを挟んだ「自己と他者とスポーツ運動」（テニスのラリー）の三位一体の互恵的な学び合いが生まれたと考えられる。4.2の児童の振り返りにある「ラリーも続くと楽しい」という記述は、「続かないと楽しくない」と表裏一体である。自身のネットの先の相手の技能向上は、自身のラリーへの参加へと繋がり、互いに①相手とラリーを繋ぐ、②ネットを挟んだ攻防をするといったテニスの面白さを享受し合う関係へと発展していったといえるであろう。総じて、双方のWell-beingの向上に繋がっていると推察される。

体育におけるボール運動は、ともすると結果の勝敗だけに児童らは囚われやすい（梅澤, 2016a）。しかし、本研究における児童の自由記述においては「結果は、ぼろ負けしましたが、楽しかったです」や「勝負をやり、助け合えましたし、みんなで楽しめたと思うので良かったです」という記載がみられる。指導者が提示した「メンバー全員で楽しむには？」という包摂的なテーマを児童らが理解し、体現していたと考えられる。すなわち、「勝敗は教育／体育の目的ではなく、共に成長するための手段」（梅澤, 2016b）として勝負を楽しんでいたということであろう。そのような互恵的な関係を基盤とした「教育的な競争」は、とりわけコロナ禍においては、全学習者のWell-beingに繋がると解釈可能である。

4.4. 本研究の限界と課題

本研究の自由記述においては「楽しい」が分散登校期間（123回）、一斉登校期間（138回）共に頻出している。児童らは、体育授業において「楽しさ」を感じていたのは明らかである。また、運動や身体活動がストレスの低減に影響を与える研究は散見される（上池, 2000; 高橋, 2012）。しかしながら、本研究における体育実践が児童のストレス減少に直接影響したかは測定できない。

さらなる続く可能性があるコロナパンデミックにおける児童の心と体を解放する実践研究を積み上げていくのが課題である。

【注】

注1) 厚生労働省の第1報は、「中華人民共和国湖北省武漢市における原因不明肺炎の発生について」（2020年1月6日付）であり原因が特定されていなかった。第3報（同年1月10日付）にて「原因病原体が新種のコロナウイルスである可能性が高まりました」という表記があり、第4報（同1月14日付）にて「遺伝子配列解析により新型コロナウイルスが同定されており、中国当局によって暫定的に本疾患の原因と判断されている」と記載されているものの、日本の厚生労働省の報道発表では、変わらず「中華人民共和国湖北省武漢市における原因不明肺炎の発生について」という表記であった。

注2) 新型コロナウイルス感染症は、2020年8月26日の正午の段階では、全世界の新型コロナウイルス感染者の総数は、23,933,343人であり、同死亡者数は820,286人である。同、日本国内の感染者数は64,752名であり、死亡者数は1,224名である。なお、新型コロナウイルス感染者／死亡者の総数は、米国ジョンズホプキンス大学HPを参照した。<https://gisanddata.maps.arcgis.com/apps/opsdashboard/index.html#/bda7594740fd40299423467b48e9ecf6>

注3) 全国に発出された緊急事態宣言の解除については、令和2年5月14日の「新型コロナウイルス感染症対策本部(第34回)」にて「新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の区域変更」がなされた。すなわち、「緊急事態措置を実施すべき区域」として北海道、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、京都府、大阪府及び兵庫県の区域とする」とされたことから、結果的に上記8都府県以外は、緊急事態宣言が解除されたこととなった。その後、同年5月21日に北海道、埼玉県、千葉県、東京都及び神奈川県以外の府県が解除され、同年5月25日に「新型コロナウイルス感染症緊急事態解除宣言」が出された。

注4) 例えば、神奈川県教育委員会における県立高校は6月1日からの分散登校及び時差登校を推奨している。横浜国立大学教育学部附属学校においても同様である。

注5) 自粛警察とは、「緊急事態宣言に伴う行政による外出や営業などの自粛要請に応じない個人や商店などに対して、偏った正義感や嫉妬心、不安感などから私的に取り締まりや攻撃を行う一般市民やその行為・風潮を指す俗語・インターネットスラングである。新型

コロナ禍におけるソーシャル・ディスタンシングゲーム

コロナウイルス感染症 (COVID-19) の流行による社会的風潮のひとつとして生じた。」(Wikipedia 2020年6月13日参照)。東洋経済オンラインによれば、新聞横断検索Gサーチ」を使って「自粛警察」をキーワードに朝日・読売・毎日・産経の4紙の記事を検索すると、4月はゼロ件だが、5月には41件がヒットしたという。<https://toyokeizai.net/articles-/356411?page=3> (2020年8月13日参照)

注6) 株式会社リンクアンドコミュニケーションは、同社が開発したアプリ使用者 16,302 人を対象に新型コロナウイルス感染拡大による身体状態や健康行動の変化に関する調査を行っている。<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000032.000018672.html>

注7) 文部科学省発出(令和2年5月1日付)の「新型コロナウイルス感染症対策の現状を踏まえた学校教育活動に関する提言」では、「2.学校教育活動の再開の具体的な方策について」内の「(2)感染のリスクが高いと考えられる活動の取扱いについて」の「(各教科活動等)において次の記載がある。すなわち、「各教科等に関する指導については、地域の感染状況に応じ、例えば、以下に示す活動を含め、感染拡大防止の観点からリスクの高い学習活動を行わないなどの感染拡大防止対策をとること。」とある。

注8) 画像の使用は本人および保護者の承諾を得ている。

【引用】

秋田喜代美 (2012) 学びの心理学. 放送大学叢書, p.23.

Harold, W. K; et.al (2012) *The pandemic of physical inactivity: global action for public health*. THE LANCET, vol. 380, p.294-305.

樋口耕一(2004)テキスト型データの計量的分析-2つのアプローチの峻別と統合-理論と方法, 19(1), p.101-115.

久我隆一・久保賢太郎・永末大輔 (2020) 〈座談会〉体育にパラダイムシフトを起こす. 体育科教育, 68(8), p.32-37.

鯨岡峻 (2005) エピソード記述入門—実践と質的研究のために—東京大学出版会.

OECD(2019)*Learning Compass 2019* <http://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/> (2020年8月13日参照)

OECD (2019) *Making Physical Education Dynamic*

and Inclusive for 2030. https://www.oecd.org/education/2030-project/contact/OECD_FUTURE_OF_EDUCATION_2030_MAKING_PHYSICAL_DYNAMIC_AND_INCLUSIVE_FOR_2030.pdf (2020年8月13日参照)

佐藤学・岡野昇(2015)体育における「学びの共同体」の実践と研究.大修館書店.

嶋田洋徳・戸ヶ崎泰子・坂野雄二 (1994) 小学生ストレス反応尺度の開発. 健康心理学研究, 7 (2), p.46-58. 新型コロナウイルス感染症対策本部 (2020a) <https://corona.go.jp/expert-meeting/pdf/kihonhousin.pdf> (2020年8月13日参照)

新型コロナウイルス感染症対策本部 (2020b) https://corona.go.jp/expert-meeting/pdf/kihon_h.pdf (2020年7月13日参照)

首相官邸 (2020) <https://www.kantei.go.jp/jp/content/00063349.pdf> (2020年8月13日参照)

高橋幸一・西田順一 (2012) 児童の身体活動および座位活動がメンタルヘルスに及ぼす影響—性と身体活動行動変容段階を考慮した検討— 群馬大学教育学部紀要.47, p109-124.

上地広昭・竹中晃二・岡光一朗 (2000) 子どもの身体活動とストレス反応の関係.健康心理学研究, 13, p1-8.

梅澤秋久(2015)学校体育における教育学的ケアリング地平. 日本女子体育連盟学術研究, 31,p.1-17.

梅澤秋久(2016a) 競争の教育学的意味. 体育科教育.64(2), p.36-39.

梅澤秋久(2016b) 体育における「学び合い」の理論と実践. 大修館書店.

梅澤秋久・矢邊洋和・石黒功 (2020a) つながりを生むソーシャル・ディスタンシングゲームづくり. 体育科教育, 68(8), p.46-49.

梅澤秋久 (2020b) Education2030 から考える「共生体育」のビジョン. 体育科教育, 68(4),p.20-24.

YNU Repository Advanced published date:
November 4, 2020